

譜

二之

物

子

海

尚  
白

又  
玄

舉  
白

真  
角

立  
志

武  
江

附  
渡  
會

大  
津

調  
和

一  
晶

團  
友

1814  
3



5  
1814  
3

5  
1814  
3

三月月の系  
科今が可有才磨  
長も如い強とど  
い所ありて丸点  
辛点可読作者  
科の一字と柱と  
あきこれ各別の  
也予ハ新と方同



立志点

三月月のありて  
死に居るといふ  
科の一字と柱と

校は切竹から根らまみり

信后とりひら人のとま

山むのあえ移ら酒を

早は舞臺の衣ぬる

六

姉の句 長点れ難  
 踊の句 壹点れ難  
 錢の句 壹評の難  
 馬まりの句 鳥の難  
 家候 壹評の難  
 右不五註よかの巻  
 よあし〜あきと  
 あり

二巻  
 何れ〜あつ今日と打たらるる  
 舞たるを後か花田つら  
 姉の句 鏡をまらばしとのと  
 踊らるる又じとふやよ  
 秋もくもあ陳あつと可送  
 後宮の句と月のはやりに  
 親の月よあまらり知れ今や

引くすた〜あま田つら  
 音たきあつとあつら  
 ね智の張苑の味淡〜あつら  
 一眠いつ〜あつら  
 洲沼〜あつら  
 去雨の曇り〜あつら  
 秋〜あつら

急種知くく長丸を

註よ曰

茶のゆくゆくは所  
は情洞思をんとの  
文字まのいゆひん  
の約何ととととと  
多しては茶のゆく  
うはは茶のゆく  
多うはは茶のゆく  
茶のゆくは茶のゆく  
徳ありととととと  
とととととととと  
より茶のゆくは所  
るもあり茶のゆく  
れ白の類いを作り  
ゆはは茶のゆくは所  
修傳りて人のゆく  
どのゆくは茶のゆく  
形ゆは茶のゆくは所  
有句よ

の半啼く村うまへん所

。歎の血み穢きう足  
くく屠者の屋の業  
くんとゆひゆくは所  
とゆひゆくは所  
とゆひゆくは所  
ゆひゆくは所  
根い生死の二のとま  
ゆひゆくは所  
て褒褒あり

け判者 湖春

競駈 平点

脇書を也調和点の  
巻よま

死のゆくは白き点  
諸方のゆくは所  
者自註しゆくは所  
ゆくは所  
かきゆくは所

死のゆくは白き点

死のゆくは白き点

死のゆくは白き点

死のゆくは白き点

死のゆくは白き点

死のゆくは白き点

死のゆくは白き点

死のゆくは白き点

死のゆくは白き点

死のゆくは白き点

死のゆくは白き点

死のゆくは白き点

死のゆくは白き点

死のゆくは白き点

死のゆくは白き点

競駈 平点

死のゆくは白き点

美海く 長点如何  
ひ新介の事よま

風流く 風流く 風流く 風流く

くく と行くと 蝶の翩翩

鮫

其め

裡 朱貳 環々

くく 云々 云々

其貳

立志判

幾句 長点の類  
房三 点更の類  
房四 点の類  
右の巻よま  
今不及証

後者と  
とていふのいふ  
のいふのいふ  
まをいふ

三日月のあつとを抄を紙書

刻の度りしれ乃も葉かん屯

杖の切弁かん恨をまめし

後者と塵衣人好か

ふまのふえ移を酒屋をさ

草から舞是れ衣装うら

後清く宗の今日と打志

○年一の空寝母花よりつら

○婦のつらる鏡もまらむまは

○踊る色くく又むとふや

○秋もくもあ陳あつと町造

○鏡もあつと月めうや

○親の目もわゆる知くと今

○すみとく馬白り

錢買かど 毎点各條  
け証書の事よあ

親の目よ何れ

極上の鳥也是如何む

句いたくはう今

のさういふれ

さういふれ

や徳方の鳥よ

け一巻の鳥と

多いうれ句作

まゆと鳥者

青字の鳥

諸方と

鳥と

家と

俳言の何よ

や如何一時軒

巻めて

青字の鳥よ

お智かん臨新味淡と

○い眠つらととまらん家様

○所詔くまあ草人場

○去雨は是よ浦の新と

○船くと若みんを草人

○とつと文おの橋も

○  
社は文心法未だ未だ

翻教教を女河や練の内

志種志くく業作定

いんいん又も響よ生心念

人中にせいの心おほく統

懐心程よのうく勝競駈

屋と若くく堂よね下蒼

競駈 極上の点如何是  
常向五七のてしし  
うい競馬くころえ下  
の五文字よころいり  
とくとり作者のき巧  
うやくら  
○競駈 似松方山立志  
点の脇字とらん  
五月五日 百草と搦  
手くわて予と同之

堀川百首

○  
又云 又云 又云  
五月 連奇の懐紙  
けり けり けり  
○  
○  
○

所この鳥はこころ  
但競る又い景  
是れまふまふ如泉  
西鶴の仔細かこころ  
久末まふまふけり  
定ら競る競駈めら  
ういと云いけり

二 依のち力いそくくく月

いふふ夫はふの麻射方

病病よ程くくめく流亦

くくまの長よ澄わくく

死のあれ念佛よ打こり

つてそくく程ぬいくく

死流くくく眺望よ

二

六

引多と行し心端を翩翩

廿八里雲中

増き朱三

七四

玉六

川中引朱 調和

知

川上引朱

其角点

三日月のあうとてと料と紙と鳥

花かんざりおんも葉の菫

杖の西弁を恨まきあしく

傾角と蘆花と人なりとまき

心とつらえ福を酒をささぐ

草如舞巻の衣おろるる心

此二巻の良善悪の序  
と云いおれましくり  
詠め遠くくんお中  
おやまぬ



けりし〜宗のなみとせとくれ

年をいそげば花のついで

ゆめ〜つら後ちのささのそと

踊ら〜き〜又い〜あ〜

秋〜く〜西陣のつら町造

後〜お〜と〜月〜わ〜

親の月おあ田の知〜と今共

と〜み〜と〜と馬田のつら

音〜を〜あ〜のほ〜のら〜

お〜智〜の〜結〜の〜味〜

け〜眠〜つ〜つ〜と〜ん〜

所〜詔〜〜と〜み〜年〜如〜

踊りて〜 意なき侍  
おの〜〜結方と〜  
息あ〜作老の自後〜  
ふ〜予〜意なき方〜

定推敲

後〜お〜と〜長〜意〜如何〜  
諸方の意はかりて〜  
また〜移〜を〜作〜意〜とは〜  
云々〜き〜れ〜と〜と〜前〜の〜此〜  
何〜は〜付〜ら〜る〜ん〜と〜心〜  
え〜〜〜

定推敲

春雨の景

脇書作者の自註

1回一かふしく湖

水に細川

棹古

春雨の景は浦を新とれく

連也

新と者よんよん草科

心よつて又古れ得も音あ

新よ又心法よ辰早

新ら新ら女りわらく律の内

新種とくく素行定

新くうく又も響よ生心定

人の中をわきわきおるく鏡

新いけしきりく勝競近

新あくと者くく素よね下巻

心法のをかひをうくく月

新よよよけはか麻射りる

棹古

競駢 極上点部を

調和点の巻よあ

死の希は句  
言息事  
松の肺は句  
松方とともいふあり  
賜まわらぬり

蘇福小粒くまうく法有ゆら

心くまふまの道ありては

死乃まの念は意よ打あそり

けさくくれぬいそく松の持

死深くくはれ眺るよ成物

うらとねくま蝶く翻翻

# 沙考

八句 三文字二

二文字二 了字四

丸八

晋子

新

其角三の巻よまうと  
く善悪の点評よ  
不友

一 晶点

三日月ありきこ料と紙鶴  
なりて居るものなりき  
杖の切竹春恨をきみ  
何れと雁あらし人なり  
心むすのきえ紅を満心をき

昇りて舞臺の衣おれり  
何れと糸れりきを打た  
舞の空霞は花田つら  
鳳のうらつ鏡もきり  
踊らるるく又じと  
秋もくも隙ありと町造

婦のえろ鏡 鳥羽  
け判者の極上と見え  
とらうきとよニ衣乃  
舞といえれき  
ありやかを又合と  
る

親の目よ何ゆれり  
眼字ト立文字の難  
馬ろされりての難

親の目よ何ゆれり  
眼字ト立文字の難  
馬ろされりての難

親の目よ何ゆれり  
眼字ト立文字の難  
馬ろされりての難

親の目よ何ゆれり  
眼字ト立文字の難  
馬ろされりての難

親の目よ何ゆれり  
眼字ト立文字の難  
馬ろされりての難

親の目よ何ゆれり  
眼字ト立文字の難  
馬ろされりての難

親の目よ何ゆれり  
眼字ト立文字の難  
馬ろされりての難

親の目よ何ゆれり  
眼字ト立文字の難  
馬ろされりての難

親の目よ何ゆれり  
眼字ト立文字の難  
馬ろされりての難

親の目よ何ゆれり  
眼字ト立文字の難  
馬ろされりての難

親の目よ何ゆれり  
眼字ト立文字の難  
馬ろされりての難

親の目よ何ゆれり  
眼字ト立文字の難  
馬ろされりての難

親の目よ何ゆれり  
眼字ト立文字の難  
馬ろされりての難

表雨の曇 脇字付  
そりしと難ありとむ  
作者の自註ありき  
凡句此面は所句あり  
何しつとて言歌鳥の

親とて者 手点  
脇言打りし乃著業  
は表句のくらしき  
う二つとて言歌鳥の  
とあつとめられき  
つと見おのりよ別業  
又い別吟とつらよ  
何しつとて言歌鳥の  
巻よあ

競駈 其馬を也

腸中其馬の心け  
しわり是如何其馬の  
よは競駈とせり  
わつまる不記さよ  
しるは其馬の心け  
大津尚白といふ  
は其馬の心け  
競駈の馬を也

競駈 其馬を也

人の中を死のおはせれ

情をわすれし競駈

其馬の心け

競駈の馬を也

心伏りてわたりて

競駈の馬を也

競駈の馬を也

競駈の馬を也

競駈の馬を也

競駈の馬を也

競駈の馬を也

中七

死のなう句

此点者の死は如智の  
点形極上と見え  
作者の註もよ  
うしるし同く

死のなう句

腸中其馬の心け  
しわり是如何其馬の  
よは競駈とせり  
わつまる不記さよ  
しるは其馬の心け  
大津尚白といふ  
は其馬の心け  
競駈の馬を也

金羽 鳥 鳥 凡 凡

五点 四点 三点 二点 一点半

多と行し蝶の翩翩

二 麟角所

長如白

金羽一

鳥一

鳥一

の珠八

一目

割

善悪の兵衛の具角  
巻よふゆきとく惣  
註略之かの巻よく  
又合とん

奉白點

三日月のあうこの科を紙巻

花のさうりりるもききもむ

枝切平を根をききあ

信好と雅好の人ちんさあ

ふんりのきき福を酒をきき

草の舞巻の衣巻のあ

田らあう紫のあうと打志

舞のあうのあうのあう

舞のあうのあうのあう

踊るあうのあうのあう

秋のあうのあうのあう



親の月よ何まかり  
長良の新調和良  
ま

家ころろ 平九  
俳言いつきまて定  
免らきそりうまや一  
時利良のまきま  
まはる

和と者 毎息毎夜也  
こころあけおろの  
娘いさかろ

後買とてり内みかろ

親の月みけりう知と今亦

とらこころき馬田らとけ

音やうまのほまのるわと

お智かん旅新の味淡とま利

け眠ころろとまかん家極

洲詔くきま草かん傷

和良の星かみ浦の新とまて

保

和と者かかんをぬ草一針

いよつと都れ橋を音あ

和女まの法系長弄

和の和と母あわし練の内

○ 恋種知くくく 素行定

○ けくくくくく 又く 樂く 生け 命く

人 中く 世を 能く 知る 色

○ 情し 程 思 ぬ け け 情 競 け け

茶を 煮 煮 け 煮 け 煮 け 下 巻

○ 山 伏 の ち り い ち ち ち ち ち ち 月

山伏乃 長息の歌  
言水忌の巻七よき

○ おもふ 志 け け け け 藤 射 け け け け

○ 歌 歌 歌 歌 歌 歌 歌 歌 歌 歌

○ 歌 歌 歌 歌 歌 歌 歌 歌 歌 歌

○ 死 の ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち

○ け け け け け け け け け け

○ 死 後 け け け け け け け け け け

二  
くまをけしむ蝶を翩翩

貳拾七墨雲の中

環貳  
朱全

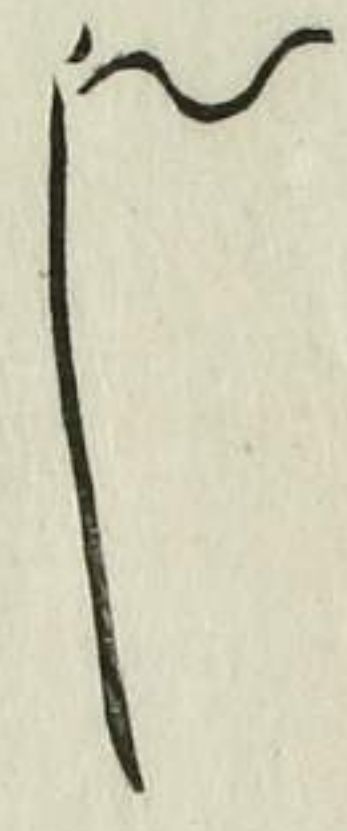
長六

丸七

珍三

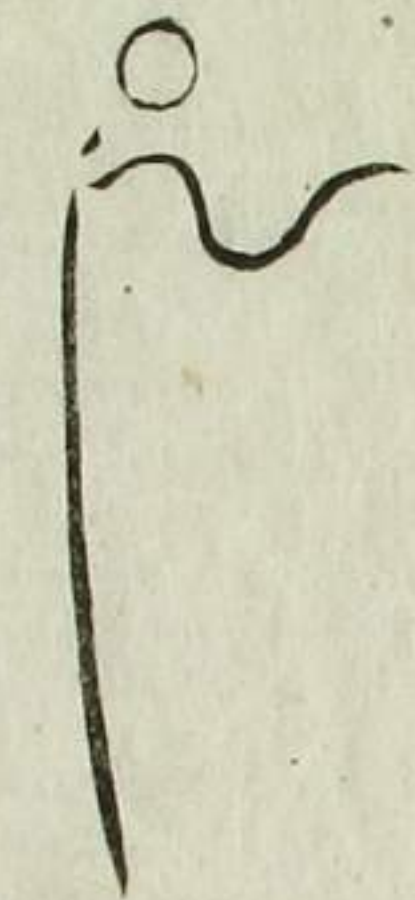
卷一  
白

白



朱引

引智の旗巻白  
引紅の脚白



朱引  
丸日茶

引智の旗巻白  
引紅の脚白

又云点

三日月のうらさの科を紙葛

花の底をいれりも草の屯

枝をさる竹も根をさる所

倒れをかしら人老をさる

ふれりのさる根を酒をさる

草を舞を底をさる

流をさる糸のさるをさる

草をさる根をさる

枝のさる根をさる

草をさる根をさる

枝のさる根をさる

脇 壹点 壹作也

徳方の鳥はうり新  
波の西鶴と此点者  
らての條は壹点か  
もかさるりさる  
て川累をさるれ  
ふくそさるの  
句まのさる  
とと壹点の句よ  
さるの壹点をわ  
一は眼の新也  
并五の句 長点  
は新の句の氣味  
予同也

傍の句 長点

作者の自註  
は新の句の氣味  
予同也

確られく 壹点

脇の句の氣味  
予同也

後書かきり月かきり

親の月より心かきり

とくしむき馬まり

高き水たつきのあき

秋の旅新の味落こ

白粉

け眠ころりてまらん

祈詔くきみ草か場

去ぬの目も 眼書  
作者自注は月一  
其角眼すし同

ま雨の星み湯か新こ

浦よ鮎湖水の心かや

新信者よりんを草か

心かきり部の様も音あ

私とて者 無忌  
脇す何とをわく海  
ほくまきりあき  
の類いりる人

新よ文心法あかん

新の心かきりあき

高橋のくま 業のついで

けいりうふと 樂女生ふるん

人中をばそ 恥のあやうき

ゆじ程思ふ じつ競駢

氣風若くく 雲く松の下巻

ふ伏のちり じつくくく月

茶と若くく 雲の  
茶の河とすれ  
馬の競馬あつ  
歌あつてもか  
進い雲のよ  
新い雲のよ  
と長息の河  
洪方の長は

けいりふと じつくく

誠痛の程 じつくく

けいりふと じつくく

死のふた 念佛のあ

けいりふと じつくく

死海のあつ じつくく

二  
乳を引く心様ハ翩翩

竹を引く心様ハ翩翩

五七

〇五

又五七

〇  
輪朱

上引朱

一軸奇妙

心不斜

三日月の

のりといふのり一は月  
並にこれより不供方  
の長者は替りては  
ゆり一は二は竹を  
こらるとして紙を  
こらるとして月のは  
こらるとして科の  
こらるとして尾の

團友点

三日月のありとこら科と紙と

紙とこらとこら科と紙と

杖切竹ハ根ハ末ハ

何れともいふ人ハ

杖切竹ハ根ハ末ハ

新

脇三弟四は善思

の思ありとん係  
冬向のよのり  
こらるとして紙を  
こらるとして科の  
こらるとして尾の

并々弄臺衣おろりたるは

ゆき〜糸の多ふは打たる色

舞舞の多〜寝り枕まつり樽

婿婿の〜後あをらむと立ぬる

踊ららむ又しすよたよ

杖杖あ〜すゑ陳わつと町道

踊ららむと 臺息弄  
い難云よ不友茶よ  
あ〜

舞舞の〜り月入るやうに

親の目よあゆり知ると今世

臥臥の〜馬まつり

舞舞の〜あめはまのりあわら

舞舞の〜味淡とかな和衆

い眠らら〜んあきら

す〜  
長息也是如何お  
あ〜商人の業  
よ公〜  
句よ何〜  
向き〜武士陣所の  
責の〜と作  
〜  
い〜と両句あ  
〜を考む  
〜も  
〜  
〜



竹石くさるる早の場

青雨の曇る小浦を釣らるる

秋風と若くはるるを思ふの外  
る海童

望みのつる朝の橋を吾もあ

秋風と若くはるるを思ふの外  
相もは

秋風と若くはるるを思ふの外

急程のつるもや 素行定

はるるのつるもや 素行定

人の中をたるる死のゆかりは

倒れ経るのつるもや 素行定

秋風と若くはるるを思ふの外  
る海童

山依りたるのつるもや 素行定

秋風と若くはるるを思ふの外

秋風と若くはるるを思ふの外

秋風と若くはるるを思ふの外

秋風と若くはるるを思ふの外

秋風と若くはるるを思ふの外

行もよ夫は今の麻射さうけり

病もよ極く多くはるる海に

海軍の詞

歌もよ其心衣よ望わくも色

海軍の詞

歌のよれ念佛もあつたこと

海軍の詞

つとては終ぬいさうし新水脚

別派もよ心眺らるるは

多しは行し心標も翻

右部指さるる内

長九

内除三

丸七

園友別

● 丸七

上引集

上二篇 集引

大形句

感

善悪の短略を帯  
よきあしき何ぞ  
なりし

二  
三日月のわがしるを料を紙馬

後集のしるしあり  
しるしあり

丸のともりのるもあはれ

枝の切竹も恨をまゝあして

竹三よりのあし

倒れとほじり人のとまゝあ

丸のあえ福を酒をあらあ

早の舞を危れ衣おむらあ

浴衣の糸のあしと打をら

けいあし

舞をらあ寝れ花をらあ

好れらあ鏡をらああ

踊らああ又しああ

秋もあああ陳あああ

後集あああ月あああ

あああ

後集あああ  
ああああああ  
ああああああ  
ああああああ  
ああああああ  
ああああああ  
ああああああ  
ああああああ  
ああああああ  
ああああああ

親の目々あまの如くは今也

とていふはまよりの如く

引つらみのはさりのあつた

猶白化あつた

お智の徳あつた味淡とつた

け賊つらつとまゝん家つら

引つらつとまゝの草の場

引つらつとまゝの浦を新とつた

引つと者まゝんとお草外

引つとつたお指も音あつた

引つとつたおははるも音あつた

引つとつたおあつたお孫の内

引つとつたおあつたお孫の内

悲しうも又も樂よ生ほんらん

凡中うせも心のおゆるさ

傍び程よのりし掛競人馳

多くと者考く貴くおくら下巻

ふ伏のらりううううううう

おとよふまはふれ麻射るううう

競遊 卒丸息  
服書とてんまを暮  
よさうれうり一晶  
と目一調和点の  
まんとんるる

病おおむねく妙く山所あり

悲しうも又も樂よ生ほんらん

あのおれ急佛あしおあを

はましうも又も樂よ生ほんらん

死はうも又も樂よ生ほんらん

くうと行し心蝶々翩翩

死の書 悲しうも  
腸書とてんまを暮  
よさうれうり一晶  
と目一調和点の  
まんとんるる

あのおれ急佛あしおあを  
はましうも又も樂よ生ほんらん

合點一廿三句之內

長六圍七

內又  
朱墨  
朱圍外

尚白判

松室軒張



